

人間精神あるいは「身体の観念」

スピノザの心身合一理論とその実践的帰結

柴 田 健 志

はじめに

精神を「思惟するもの」として、物体（身体）を「延長するもの」として「実在的に区別」するデカルトのいわゆる心身二元論は、精神を物体（身体）とは独立に機能しうる実体とみなすことによって、数学的観念の生得説を確立し、数学的自然学の可能性を基礎づけるための戦略であったといつてよい。だが他方、デカルトの二元論は、精神に固有の機能として「自由意志」を認め、それを中心にして「心身合一」という人間の現実的なあり方を理解しようとする、実践的な帰結をも伴っている。つまりデカルトにとって、心身問題は理論的問題であると同時に、実践的問題でもあった。スピノザは、心身の「実在的区別」を受け入れ、かつそれを理論的に徹底させることで、実践的にはデカルトとは正反対の帰結を導いた。スピノザは、「自由意志」に基礎をおくのではなく、むしろそれを幻想として否定することで、まったく異なった意味で人間の自由を考えようとしたのである。この点をより厳密に言えば、スピノザは、デカルトが知識論的領域とは区別して残しておいた実践的領域を、知識論的領域のなかに完全に吸収し、どこまでも知的な問題として「自由」を理解しようとしたことの帰結として、「自由意志」を否定して「自由」を思考せざるをえなかったのだということになる。

スピノザの議論の徹底性は、神以外には実体を認めず、心身の「実在的区別」は神＝無限実体における「属性」の区別であるとして、思惟と延長を存

在論的には同一物とみなした点に存する。思惟も延長も実体を構成する属性であり、ともに神の本質である「現実存在し、活動する能力」(EI35Dem.)を表現している。そして、人間という個物は神の有限な「様態」であると考えられるがゆえに、人間の心身とは「神の本質を一定の仕方で表現する」(EII10Cor.)、有限な様態という同一物の二側面にほかならない。問題はこの二側面の相互関係であるが、それはたんなる対応関係ではない。「思惟」という属性において自らの「思惟能力」を表現する神、言い換えれば「無限知性」(EI16Pr.Cor.1)は、それ自身の活動から生じるすべてのことを思惟しなければならない。人間の精神とは、「神の無限知性の一部分」(EII11Cor.)であり、その思惟対象は身体である。この意味で人間精神とは「身体の観念」(EII15Dem.)にほかならない。わたしは、心身問題にかんするスピノザの理論の核心は、この「身体の観念」という考えにあると思う。そこでこの考え方が、いかなる論理によって主張されているのか、またそれが、心身合一という人間の現実のあり方にかんじていかなる理解をもたらすのか、さらにそこからいかなる実践的帰結がひき出されうるのか。とりわけ、スピノザがいかなる観点から人間の「自由」をとらえようとしていたのか。これらの点を以下で議論しなければならない。

1 心身平行論と「身体の観念」

人間精神とは「身体の観念」であるというスピノザの主張の意味を的確に理解するには、人間精神は「神の無限知性の一部分である」といういまひとつの主張との関連を問題にすべきである。「無限知性」とは、「無限に多くのもの」(EI16Pr.)を産出しつつ、それらを思惟している神であり、したがって「無限知性」のなかに、ある有限なものの観念のみが単独であることはできない。なぜなら、もし無限知性のなかに有限なものの観念しかないとすれば、無限知性が有限なものしか思惟しえないということになるからである⁽¹⁾。それゆえ、ある有限なものの観念は、他の無限に多くのものの観念とともに

存在するのでなければならない。「神のなかには、神の本質の観念と同様に、神それ自身の本質から必然的に帰結するすべてのものの観念が、必然的に存在する」(EII 3 Pr.)。スピノザによれば、神が「無限に多くの仕方で」(EI16Pr.) 思惟しているということと、神が「無限に多くのもの」(ibid.) を産出するということは、神の同一の活動の二面である。それゆえ、「観念の秩序および連結は、事物の秩序および連結と同一である」(EII 7 Pr.)。換言すれば、「神の無限の本性から形相的に (formaliter) 帰結するすべてのことは、神の観念から同一の秩序、同一の連結をもって、神のなかに表現的に (objective) 帰結する」(EII 7 Cor.)。こうして、無限の個物が神から産出される時、その全系列は、観念の無限系列として「神の無限知性」によって思惟されているということになる。

いま引用した『エチカ』第二部定理七では、「観念」に対応するものがただたんに「事物 (res)」といわれており、とくに「物体」とはいわれていない、という点にまず注意すべきである。神から産出されたと考えられる個物＝様態が、「延長」の属性のみならず、およそどの属性において考えられる場合にも、それが「神の無限知性」によって思惟されている、というのが定理七の意味するところである。それゆえ、無限の属性において考えられる「事物」は、存在論的には同一物であるが、知識論的なレベルでは事情はもっと複雑である。このレベルではむしろ、「属性が与えられるその分だけ多くの世界が構成される」(Ep.64) のであって、それゆえ同一物の観念は無限に存在すると考えられる。「各々のものは、神の無限知性のなかで、無限の仕方と表現される」(Ep.66)。こういう条件の下で、とくに「延長」の属性のみに注目するとき、そこに「心身平行論」といわれる論理が成立するのである⁽²⁾。つまり、「心身平行論」とは、「延長」の属性によって考えられた個物の無限系列と、無限知性のなかでの「延長」を対象とする観念の無限系列が平行しているという主張である。有限な個物の心身の関係は、この「永遠かつ無限」(EI21Pr.) なレベルでの「心身平行論」を前提した上で理解されなければならない。

人間身体と呼ばれる「事物」の観念を考えてみよう。それは、無限知性においては、「延長」を対象とする観念の無限系列のなかに位置している。つまり、人間精神とは、それが「身体の観念」であるかぎりにおいて、「神の無限知性的一部分」であると考えられるのである⁽³⁾。人間精神とは、それ自身から産出されたものを、「延長」の属性において思惟するかぎりでの「無限知性的一部分」なのである。しかし、人間身体という「事物」が、「永遠かつ無限」な秩序のなかにあるだけでなく、「持続するといわれるかぎりにおいても現実存在する」(EII 8 Dem.) 場合にも、その観念たる人間精神は「神の無限知性的一部分」(EII11Cor.) であると考えられている。ただし、この場合は、「無限であるかぎりにおいて」の神でなく、「現実存在する他の個物の観念に変様したと考えられるかぎりにおいて」の神がその人間精神の原因であると考えられるのである (EII90Pr.)。つまり、永遠の秩序から自らを疎外し、無際限に進む有限な事物の相互作用のなかでそれ自身の身体を思惟する知性、それが「身体の観念」として、あるいは「神の無限知性的一部分」として現実存在する人間精神にほかならぬ。

以上のような議論に従えば、人間精神の思惟対象は身体以外にはなく、したがって人間精神は身体に生じることを思惟せざるをえない (EII13Dem.)。「心身合一」という事態が人間にとって根源的なものである理由はここにある。つまり、それ自身を「延長」の属性において思惟しなければ現実存在しえない存在、それが人間精神なのである⁽⁴⁾。ただし、人間身体はつねに他の物体との相互作用のなかに存在すると考えられるので、人間精神が認識するのは、人間身体そのものではなく、相互作用によって身体に生じた結果でしかない。それ以外の仕方では、自己の身体の現実存在を認識しえないのである。スピノザは身体に生じた結果を「変様 (affectio)」と呼び、その認識の意味についてこう述べている。「人間精神は、人間身体それ自身、およびそれが現実存在するということを、身体が被る変様 (affectio) の観念によってのみ認識する」(EII19Pr.)。

ところで、人間身体の変様は、外部の物体の作用によって生じたものであ

る。したがってそのなかには、ただ部分的にはあれ「外部の物体の本性」が含まれており、人間精神はやはりそれを思惟せざるをえない。「身体の変様の観念」は、「人間身体の本性と同時に、外部の物体の本性を含まねばならない」(EII16Pr.)のである。ここから、自己の身体を中心にした外部の世界のパースペクティヴ、すなわち「表象像 (imago)」が生じるのである(EII17Sc.)。また、「身体の変様の観念」についての観念も神のなかにあると考えられるのだが(EII20Pr.)、この観念は、現実存在する人間精神においては、「身体の変様の観念」についての観念となる。「人間精神は、身体の様々な変様だけでなく、これら変様の観念も知覚する」(EII22Pr.)。これが人間の意識である。というより、人間の意識はこういうものとしてのみ与えられうる。「精神は、身体の様々な変様の観念を知覚する限りにおいてのみ、自己自身を思惟する」(EII23Pr.)。こうして、身体を起点にした外部の世界の「表象像」についての意識として、人間の「自己」が成立する。それは、「表象像」を内容として含む思惟作用そのものを対象にした、いまひとつの思惟作用にほかならない。この思惟作用によって、人間は「心身合一」という事態を、自己自身のものとして自覚するのである。

さてスピノザは、このように「心身合一」を自覚しつつ存在するものとしての人間精神のあり方を、「不十全 (inadequata)」という言葉で規定している。では「不十全」とは何であろうか。人間精神に生じる「身体の変様の観念」は、「身体の変様」をもたらした物体の相互作用の系列に対応していない。逆にいえば、この観念から、「身体の変様」が生じた理由を導くことはできない。われわれはただ、身体を起点にした世界の表象像を、所与として受け取るのみである。それが「不十全」である(EII26Cor.,28Pr.Dem.Sc.)⁽⁵⁾。しかし、この「身体の変様」という事態は、人間身体に作用する諸事物の観念に変様した神の知性によって、それが生じた理由とともに思惟されている。それが「不十全」に対する「十全 (adequata)」である⁽⁶⁾。また同様に、人間精神が所与のことを思惟している理由は、その身体の変様の観念をいくら思惟しても出てこない。つまり、人間精神という観念の観念、すなわち自己自

身にかんする認識もまた「不十全」である (EII29Pr.Cor.)⁽⁷⁾。これに対して、神は人間精神という観念を含む諸観念となって思惟しているがゆえに、それがいかなる理由で一定のことを思惟しているかを把握しうるのである。

このように、「不十全」とは、「心身合一」したものとしての「自己」を意識して現実に存在している人間精神が、まさに現にあるとおりに存在している理由の認識から、根本的に疎外されているという事態を意味している。問題は、この「不十全」という理解の仕方が、いかなる実践的帰結をもたらすかである。デカルトがその自由意志の道徳を提示するにあたって、感情（情念）の考察から始めたように、スピノザもやはり『エチカ』第二部での「精神の本性および起源」にかんする以上のような議論に続けて、第三部では「感情の起源および本性」を証明している。その議論を踏まえた上で、この問題点を考察していかなければならない。

2 感情の論理

『エチカ』第三部定義三でスピノザは感情を次のように定義している。「感情 (affectus) とは、我々の身体の活動能力を増大あるいは減少し、促進あるいは阻害する身体の変様 (affectio), また同時にそれら変様の観念であるとわたしは解する」。我々の身体は外部から複雑な仕方で作用を受けていると考えられるが、その作用によって身体そのものがもつ「活動能力」が増大したり減少したりするだろう。この「活動能力」の現実的な作用を、スピノザは「コナトゥス」と呼んでいる (EIII 7 Pr.)。「コナトゥス」とは「各々のものが自己の存在に固執しようと努める」(ibid.) 作用であるが、この作用はつねに外部の力による影響を被っているわけである。「身体の変様」がその「活動能力」の増大ないし減少を意味するのはこのためである。スピノザは、まずはそのような身体の変様が感情であり、また同時にそのような身体の変様の観念が感情であるという。しかし、スピノザは身体の変様が感情の原因であるといっているのではない。身体の変様とその変様の観念をとも

に感情としているのである。感情という言葉の通常の用法からみれば、こうした定義は奇異である。なぜなら通常の用法では、感情という語はもっぱら精神について用いられるからである。

スピノザの考えでは、延長の属性と思惟の属性は実在的に区別されうるがゆえに、それらのあいだには相互作用は存在しない。それゆえ「身体は精神を思惟するように決定することはできないし、また精神は身体を運動にも静止にも他のこと（もしそれがあるとして）にも決定することはできない」（EIII 2 Pr.）。むしろ、「精神と身体は、ある時には思惟という属性のもとで、またある時は延長という属性のもとで概念される同じもの」であり、それゆえ「われわれの身体の能動と受動の秩序は、本性として我々の精神の能動と受動の秩序と同時」（EIII 2 Sc.）であると考えられるのである。したがって存在論的には、「感情」とは「身体の変様」といってもよいし、その「観念」といってもよい。

ただし、心身の関係は、このように存在論的に理解されると同時に、知識論的にも理解されなければならない。というより、スピノザの議論の重点は、どちらかといえば知識論的な理解の方にあると解釈すべきである⁽⁸⁾。つまり、身体の能動・受動と精神の能動・受動はただたんに「同時」なのではない。精神が形成する観念は、身体の変様を知覚内容として含むからである。「人間精神を構成する観念の対象は、身体すなわち延長の現実存在するある一様態であり、それ以外の何ものでもない」（EIII 13 Pr.）。それゆえ、スピノザのいう「感情」とは、心身において「同時」に生じる変様であるが、それが喜びあるいは悲しみとして感じられるのは精神においてのみである。精神の側でみられた感情とは、精神のコナトゥスたる「思惟能力」（EIII 11 Pr.）の増大ないし減少であり、それが「喜び」ないし「悲しみ」と呼ばれるのである。そしてスピノザは結局この意味で「感情」という言葉を用いていく。「わたしは以下において喜び（Laetitia）を精神がより大きな完全性へ移行する受動と解し、反対に悲しみ（Tristitia）を精神がより小さな完全性へ移行する受動と解するであろう」（EIII 11 Sc.）。

